7．7 堀之内城主花井家のこと

「八幡の語り草」第 23 話（195 頁）

寺本の大祥院の住職さんから聞いた話をまとめたものである。

花井家は6、7代寺本の堀之内城の城主であった。花井播磨守信忠が城主であった頃、信忠は今川義元の勢力下にあったため、織田軍が今の東浦町の村木砦を討ち落としてから、その勢いで堀之内城を攻略した。そのため、信忠は落ちのびて長野方面へ逃げた。

やがて、戦火も鎮まると信忠は住みなれた温暖な知多へ戻ってきた。信忠は今の大府市の吉田のあたりに居を構え農に帰った。もともと体力もあり、頭の働きも優れていた信忠は、百姓として大いに手腕を発揮した。その仕事に新田の開発があった。地元では、米田地区の開発、遠く離れた地区では木曽崎、長島地区の開発がそれである。（木曽崎、長島地区の開発は花井家の子孫の仕事のようだ。）

長島新田元禄には、現在も花井姓の家が7件ほどあるという。木曽崎、桑名方面にも、やはり花井姓の人がいる。これらの人々は堀之内城主花井氏の系累筋である。

鈴木天山という永平寺の管長があられたが、この人はもとは花井天山という方であり、花井家の血筋の方であった。

花井家の菩提寺は、大祥院であった。この大祥院は、当地方きっての禅寺で、たくさんの末寺を有したなかなか勢力のあった寺であった。しかし、第2次世界大戦後農地解放が行われて、寺領の田畑が人手にほとんどわたり、また、たくさんあった末寺もそれぞれ独立して本寺との縁を薄くしてしまった。そのために、大祥院の昔の勢力は衰えてしまった。

大祥院の本堂の屋根を葺きかえるには、たくさんの葦が必要であるが、この材料は、木曽崎や長島在住の花井家や大橋家が寄付していた。